

6月号

校長室だより

令和8年5月29日
座間市立相武台東小学校
校長 柏木 直樹

新年度がスタートして2か月を迎えます。校内を巡回していると、子どもたちが落ち着いて授業に向かい、友達と学び合いながら意欲的に取り組んでいる姿が見られ、たいへん嬉しく思います。新しい学級にも慣れ、それぞれが自分らしい学校生活を築き始めていることを頼もしく感じています。

これからも子どもたちには、充実した楽しい学校生活を送ってほしいと願っています。しかし、子どもが成長していくためには、楽しい経験だけでなく、ときには困難に向き合い、乗り越えていく経験も欠かせません。そうした経験が、心のしなやかさや粘り強さにつながっていきます。

一方で、近年の社会の変化は、子どもたちの育ち方にも影響を与えています。核家族が増え、地域の自治会加入率も年々下がり、かつてのように近所の大人や異年齢の子どもたちと自然に関わる機会が減ってきました。地域の中で多様な人と触れ合い、時には注意されたり、助けてもらったりしながら育つ経験は、子どもにとって大切な「人との距離感」や「気持ちの調整」を学ぶ場でもありました。

しかし、こうした関わりの場が減ることで、子どもたちが小さなストレスに触れ、乗り越える機会も少なくなっています。便利さが増す一方で、情報の多さや人間関係の複雑さなど、子どもたちが日常的に感じるストレスは以前よりも多様になっているにもかかわらず、それに備える経験が十分に積みにくい状況が生まれています。

だからこそ、学校で過ごす時間の中で、友達との関わりや学習のつまずき、役割を果たす経験などを通して、子どもたちが少しずつ心の力を育てていくことが、これまで以上に重要になっています。こうした時代において、学校で学ぶ意義の一つとして、私は「ストレス耐性を育てること」をとっても大切なテーマだと考えています。

ストレス耐性とは何か

ストレス耐性とは、困難や不安に直面したときに、気持ちを立て直し、前に進む力のことです。これは特別な才能ではなく、日々の経験の積み重ねによって育つ力です。

子どもたちは、学校生活の中で、「友達の意見の違い」、「学習のつまずき」、「役割や責任を果たす経験」、「挑戦と失敗」といった、日常の中の“ちょっとした困難”に出会います。

これらは一見すると避けたい出来事のように思えますが、実は子どもたちの心を強くし、将来の大きな壁に向き合うための土台となる大切な機会です。(もちろん、子どもたちが過度なストレスを抱えないよう、大人が見守り、必要な支援を行うことは欠かせません。)



学校だからこそ得られる経験

学校には、家庭とは異なる「集団の中での学び」があります。例えば、「自分の思い通りにならない場面に出会うこと」、「相手の気持ちを想像しながら折り合いをつけること」、「努力を続けることで達成感を味わうこと」、「失敗しても、また挑戦してみようと思える環境があること」。

これらは、子どもが社会で生きていくうえで欠かせない力を育てます。特に、「失敗しても大丈夫」という安心感は、学校という集団の中でこそ育ちやすいものです。また、授業や行事、委員会活動など、子どもたちが自分の力を発揮する場面は多岐にわたります。成功体験だけでなく、思い通りにいかなかった経験も含めて、すべてが子どもたちの成長につながっています。



保護者の皆様をお願いしたいこと

子どもが小さな壁にぶつかったとき、すぐに取り除いてあげたくなるのは、保護者として自然な気持ちだと思います。しかし、時には少し距離を置き、「どう乗り越えるかを一緒に考える」姿勢を持っていただけると、学校での学びと相まって、より豊かな成長につながります。

「子どもが悩みを話してきたときは、まず気持ちを受け止める」、「すぐに解決策を提示するのではなく、子ども自身の考えを引き出す」、「できたことを丁寧に認め、自己肯定感につなげる」。

こうした関わりは、子どもが自分の力で困難に向き合う姿勢を育てます。

学校としての取り組み

本校では、子どもたちが安心して挑戦できる環境づくりを大切にしていきます。

「教職員が日々の小さな変化に気づき、声をかける」、「友達との関係づくりを支える学級活動」、「自分の気持ちを言葉で伝える力を育てる授業」、「行事や活動を通して、協力し合う経験を積む」。

こうした取り組みを通して、子どもたちが「困ったときに頼れる大人がいる」、「自分は大切にされている」と感じられる学校を目指していきます。

最後に

学校は、学力だけでなく、心の力を育てる場でもあります。子どもたちが安心して挑戦し、失敗し、また立ち上がることができるよう、これからも丁寧に支えてまいります。保護者の皆さまには、引き続き温かいご理解とご協力をお願い申し上げます。